

中学校 美術科学習指導案

日 時 平成 23 年〇月〇日
対 象 〇〇立〇〇中学校
第 1 学 年 〇 組

1 題材名 「一版多色版画で和の世界を表現する」 A表現(1) B鑑賞(1)

2 題材の目標

版画の表現活動を通して日本の伝統文化(美術)の素晴らしさを理解して味わう。

3 題材について

(1)本題材に取り組む理由

現代の生活は多くの部分が洋式化され、便利でデザイン性に優れたものに囲まれている日常であるが、その反面で日本伝統の文化や美しさへの意識が低くなっていると言われることが多い。中学校では校外学習や修学旅行などから日本の古都・文化遺産を訪れ、その価値と魅力を学習する場面がある。美術科をはじめとする様々な教科の学習を通して日本独自の「和」の世界に興味をもち、その素晴らしさを味わうことは中学生にとって重要な体験である。

本題材では日本伝統の美術表現の中でも平面の表現を扱う。日本画・版画作品・襖絵・屏風・着物・家紋のデザインなどの鑑賞から発見できる日本の動植物や水の流れをモチーフ等とした模様と色彩は、新鮮でありながらもどこか懐かしく親しみがあることに気付かせる。日本独特の「間(余白のバランス)」や「線の表現」「伝統的な色彩の美しさ」の表現に注目させ、作品制作をすることで、独自の構想を練りながら画面や色彩を構成して表現する力を育成することができると考え、本題材を設定した。

日本の版画の歴史では江戸時代の多版多色木版による浮世絵が有名である。当時の絵師・彫り師・刷り師の技術の素晴らしさを理解するためには鑑賞だけで終わるのではなく、同じ木版の表現の1つである一版多色版画の制作を体験することで、より理解が深まり「和の世界」魅力を味わうことができる。

(2)題材の内容

本題材では「和」という日本の伝統美術に的を絞った題材であるため、アイデアスケッチの具体的なモチーフを描く場面では、日本ならではの模様や動植物などの表現をまとめた参考資料を準備し、発想の手掛かりとさせる。単純に好きなものを描くのではなく、あくまで日本独特の「和」の雰囲気のある作品の完成を目指すために、アイデアスケッチと下絵の制作の際に描くモチーフは日本文化独自の模様や動植物・自然物(水・雲など)具象物(扇や鼓など)を使うように指導する。

また、版画の魅力は刷り上がった時の偶然性にある。一版多色版画を経験したことがない生徒にとって刷り紙を開く時の期待感と独特のかすれやにじみの表現に対する驚きは絵画表現では感じることはできない新鮮な喜びである。木版画ならではの表現の楽しみを味わいながら制作させていく。

(3)題材の目標を達成させるための具体的な方法

- ① 日本の美術作品から、伝統的な模様、線の表現、色彩があることを知り、その美しさを学習する。

導入時の参考資料では画面構成の美しさ、線や色彩の工夫が鑑賞を通して分かりやすいものを提示する。伊藤若冲：動植綵絵、尾形光琳：紅白梅図屏風・燕子花図屏風、葛飾北斎：富嶽三十六景、着物の伝統的な模様

とデザイン、家紋、日本の古いマッチ箱のデザインなど

- ② 日本画、着物の模様などを参考にして、単純形を使ったおおまかな画面の構成を考える。
絵画の構成要素（バランス、リズム、アクセント、等）を考えて構成させる。アイデアスケッチの記入例を提示して、制作の具体的なイメージをもつことができるようにする。
- ③ 画面の構成に「和」を意識した具体的なモチーフをあてはめてアイデアスケッチ、下絵を描く。
画面の中での「間」（余白のバランス）や「動き」を意識させ、線の表現や配置・配色の美しさを工夫し、追求させる。彫りの作業が困難にならないためにも、ある程度大きく描くことを留意させる。
アイデアに時間がかかり、独自の発想を基にした美術作品をつくることへの苦手意識を強くもっている生徒の支援として伝統模様をまとめたプリントと※「watch2」を資料として配布し、写真や図から発想を膨らませることができるようにする。
- ④ 下絵の線に強弱の表現を加えてトレーシングペーパー、カーボン紙を使って版木に下絵を転写する。
画面の中で主役となるモチーフは線を太くして強調させる。転写の手順と材料の使い方を理解し、正しい作業ができるようにする。特に、図を反転させて版に写すことを忘れないようにする。
- ⑤ 切り出し刀の特徴と安全な使い方を理解し、線の強弱（太さ）を考えながら、版木を彫る。
「彫り」の作業では映像教材と実物投影機による実演を行うことで、切り出し刀の正しい使い方と刃物を扱う際の安全指導を徹底する。また、彫りの段階での線の強弱が分かりやすい参考作品を用意する。
- ⑥ 一版多色版画の制作を理解し、ポスターカラーを使って日本の伝統色を参考にした刷りをする。
「刷り」の作業では配色を設定する時に物の固有色だけを考えるのではなく、日本の伝統色を参考にした日本独特の色彩の表現を追究させる。実際に刷る場面ではポスターカラーを使用するため、手順を理解し、手際よく素早い作業ができることと、重ね刷りによる深みのある色彩表現ができるよう指導する。
- ⑦ 作品の相互鑑賞を行い、自他の作品の工夫やよさを発見し、味わう。
自他の作品へのこだわりや工夫を発見し、「和の世界」の魅力を見つめ直すことができる内容の鑑賞シートを準備する。また、作品完成後は台紙に貼り自宅の玄関や居間に飾ることを説明し、作品を大切にしたい気持ちをもつことができるようにする。 ※出典 「watch2」（学習図書教材） 秀学社

4 生徒観 既習事項の不足・・・彫刻刀の経験、これまでの作品、生徒の制作時の客観的実態など

1年〇組は全体的に制作活動に意欲的に取り組むことのできる生徒が多いクラスである。授業者の発問への反応も良く、生徒の意見から授業を展開させていくことができる。前題材で行った立体制作では各自が工夫をこらしながらより良い作品の完成を目指し、集中して取り組むことができた。しかし、導入時のアイデアが思いつかずに作業が滞ってしまう生徒がでることも現状であり、そのような生徒をつくらないためにも目標を明確にし、作品の具体的な完成のイメージをもつことができるような資料の準備と授業の展開が必要である。また、個人の技術的な力の差により、制作の進行状況に遅れが出てしまう生徒の対応として、助言や場合によっては作業の支援などの特に丁寧な個別指導が必要である。

5 材料・用具

- [生徒] 筆記用具、教科書、資料集、絵の具セット（ポスターカラー）、新聞紙、参考資料
- [授業者] 「和の世界」に関する参考資料（伊藤若冲、尾形光琳、着物の模様他）、実物投影機、重要語句（掲示用マグネット）、伝統模様プリント、アイデアスケッチ・下絵シート、watch2（生徒数分36冊）、一版多色版画セット（B5サイズ）、黒ラシャ紙（予備の刷り紙用）バレン、トレーシングペーパー（B5サイズ）カーボン紙、鑑賞シート

6 題材の評価規準と学習活動における具体的な評価規準

		ア 美術への関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準		日本伝統の美術と版画制作に興味をもち、意欲的に取り組んでいる。	自分の独自の世界をつくるために、自分らしい表現を考え追究することができる。	材料の特性を活かして正しく使用し、丁寧に美しく表現ができる。	参考作品や自他の作品から日本伝統の美術の素晴らしさを味わうことができる。
学習活動に即した具体的評価規準	導入 (第1時) 「和の世界」 アイデアスケッチ	①「和の世界」に興味をもち、意欲的にアイデアスケッチに取り組んでいる。	①「和の世界」を理解し、参考資料などから発想を膨らませ、独自の画面の構想を練ることができている。		①「和の世界」に興味をもち、その特徴や美しさを感じ取ることができている。
	展開〔1〕 (第2・3時) 本時 第2時 〈下絵完成〉	②線の表現に興味をもち、こだわりをもった作品を制作しようとしている。	②強弱のある、より良い線の表現を考え下絵を完成させようとしている。	①転写の手順と材料の使い方を理解し、正しい作業ができている。	
	展開〔2〕 (第4～6時) 一版多色版画 「彫り」	③彫りの表現に興味をもち、安全な作業で線の表現をしようとしている。		②切り出し刀の特性を活かして正しく使用し、丁寧に美しく線を彫る作業ができている。	
	展開〔3〕 (第7～9時) 一版多色版画 「刷り」	④ポスターカラーを使った刷り表現に興味をもち、作業を通して独自の世界を表現しようとしている。	③自分らしい世界を追求し、日本の伝統色を参考にした配色の工夫をしている。	③ポスターカラーの特性を活かしてこだわりをもち、手際良く丁寧に美しい着彩を完成させている。	
	まとめ (第10時) 「発表」 相互鑑賞	⑤自分の作品を見つめ直し、こだわりと工夫を再確認している。 ⑥友達の作品の個性を発見し、見つけた工夫やよさを感じ取ろうとしている。			②自分の作品の努力点、成果、課題を見付けることができている。 ③作品から表現の効果や魅力を感じ取ることができる。

7 指導計画（全10時間）

		学習内容	指導の重点	評価の 観点	評価方法
導入	第1時	「和の世界」 日本の美術作品から、伝統的な模様、線の表現、色彩があることを知り、その美しさを学習する。 ----- 「アイデアスケッチ」 単純形を使ったおおまかな画面の構成を考えてから 「和」を意識した具体的なモチーフを当てはめてアイデアスケッチをする。	画面構成の美しさ、線や色彩の工夫が鑑賞を通して分かりやすいものを提示する。 ----- 絵画の構成要素を例に挙げ、画面の中での大きさや配置のバランスを考えさせる。 アイデアスケッチの記入例から具体的なイメージをもつことができるようにする。	ア① イ① エ①	授業観察 アイデア スケッチ 記入内容
展開 〔1〕	第2時 本時	「下絵を完成する」 アイデアスケッチを基に線の強弱を考えながら版木と同じ大きさ(B5)の下絵を完成させる。	間・動き・強調などの画面の効果を意識させる。 表現技術が十分でない生徒には個別に助言・支援をする。	ア② イ② ウ①	授業観察 下絵完成度
	第3時	「転写」 下絵を版木に転写する。	転写の手順と材料の使い方を理解し、正しい作業ができるように指導を行う。		
展開 〔2〕	第4時 ～ 第6時	「彫り」 切り出し刀の特徴と安全な使い方を理解し、線の強弱（太さ）を考えながら、版木を彫る。	映像教材と実物投影機による実演を行うことで、切り出し刀の正しい使い方と刃物を扱う際の安全指導を徹底する。	ア③ ウ②	授業観察 木版の完成度
展開 〔3〕	第7時 ～ 第9時	「刷り」 一版多色版画の制作を理解し、ポスターカラーを使って日本の伝統色を利用した刷りをする。	日本の伝統色を参考にした色彩の表現を追究させる。 ポスターカラーを使用し、手際の良い作業で重ね刷りによる深みのある色彩表現ができるように指導する。	ア④ イ③ ウ③	授業観察 刷りによる 着彩完成度
まとめ	第10時	「鑑賞」 自分の制作を振り返り、自己評価する。 友達の作品を鑑賞し、工夫やよさを発見して味わう。	他の作品の魅力を発見させ、工夫やよさをシートに記入させる。 作品完成後の用途を説明する。	ア⑤⑥ エ②③	授業観察 発表・鑑賞 ワークシート 記入内容

8 本時の指導

(1) 本時のねらい

- ・アイデアスケッチを基に「間」(余白のバランス)や「動き」の画面構成を考え、修正を加える。
- ・線の強弱を創意工夫して描き、強調を感じられるような画面を構成する。

(2) 展開

活動	学習活動	指導内容及び、規準を達成できない生徒への支援	評価の観点
導入 2分	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の振り返り ・本時の目標を理解する。 「版画のための下絵を完成させる。」	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の美術作品には、伝統的な模様、線の表現、色彩があり、画面に美しく構成されている。 ・授業前に前時に描いたアイデアスケッチ(6×8.5センチ)2種類の用紙を配布しておく。 「美しく迫力のある下絵を描こう」	ア②
展開① 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・下絵完成までの手順の説明を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・下絵完成のための2つの手順を提示し説明する。 ① アイデアスケッチをB5の大きさに拡大して描く。 ※用紙のサイズが大きくなる際に描いたものが小さくならないように注意させる。 ② 線の強弱を工夫し、迫力のある下絵を完成させる。 (発問)線に迫力を出すためにはどうすればいいだろう？ (反応)→線を太くする・細くする ※一本の線の中でも先を尖らせたり、途中で広げたりすることでさらに迫力が出ることを伝える。 ※画面の中で主役となるモチーフは線を太くして強調させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・授業者は実物投影機とプロジェクタを使い、スクリーンに投影しながらアイデアスケッチの拡大の仕方と線の強弱による印象の変化を、参考作品を用いて実演する。 	イ②
展開② 35分	<ul style="list-style-type: none"> ・アイデアスケッチをB5の大きさに拡大してシャープペンシルで描く。 ・下絵の線に鉛筆を使って強弱をつけて完成させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・B5サイズになった下絵の中で画面の「間」(余白のバランス)と「動き」が表現されているかの画面構成を確認し、改善点があれば、付け加えるなどの修正をさせる。 ・本時で描く下絵の線がそのまま作品の線になることを伝え、円形のものにはコンパスを、直線には定規を使うなどの丁寧な作業を心掛けさせる。 ・太くした線は鉛筆で黒く塗りつぶしていくようにする。 ・机間指導をしながら、作業に困難を感じている生徒には個別の指導・支援を行なう。 	ウ①
まとめ 3分	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒参考作品提示 ・片付け ・次時の活動内容を聞く 	<ul style="list-style-type: none"> ・下絵を完成させている生徒の作品をプロジェクタで投影し、どこがどう優れているのか、制作のポイントを全体にむけて講評する。 ・次時は版木への転写に入ることを伝える。 	

9 授業観察の視点

- (1) 生徒が目標を理解し、意欲的に制作に取り組めるような導入となっているか。
- ①板書の内容、参考作品の提示が見やすいものであったか。
 - ②線の強弱のつけ方に関する説明が短時間で分かりやすい内容であったか。
 - ③プロジェクタを使用した実演や作品掲示が効果的であったか。
- (2) 本題材が生徒の実態や能力に即したものになっているか。
- ①一般多色版画の作品づくりとして「和の世界」というテーマが題材として適していたか。
 - ②線に強弱のある下絵の制作が取り組みやすい授業展開になっていたか。
 - ③本題材が本校中学校1年生としてふさわしいものであったか。

10 板書計画

- ・テンポのよい授業展開のために、重要なポイントとなるキーワードはマグネットで掲示する。

〈美しく迫力のある下絵を描こう〉

①アイデアスケッチを拡大する…………… 間 (余白のバランス) 動き
画面の中での配置はよいか

②線に強弱をつける…………… 太くする 細くする 尖らせる など
主役は**太い線**で強調する。

- ・スクリーンは黒板の生徒全員が見やすい位置に設置し、部分の拡大をする際は実物投影機を使用する。
- ・まとめ時の参考作品は生徒のものを使用し、互いの制作意欲につなげる。